
雪影

如月奏

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

雪影

【Nコード】

N6442X

【作者名】

如月奏

【あらすじ】

雪の降る季節が終わり、また春が巡ってきた。しかし、今年で高校二年になる阿宮恵一は、今まで通りの平穏な生活が続けばそれでよいという、向上心の欠片もないことを思っていた。そんな中、校門の前でうろうろしている見慣れない女子生徒と出会って……。

プロローグ

外に出るのも億劫になるほど北風が強く、雪が冷たかった日々と比べれば、少しばかり日差しも暖かくなっており、ようやくと新しい季節が巡ってきたのだということを実感させてくれる四月。俺は進級して高校二年になっていた。

担任、小嶋こじま先生の雑談が、退屈なことこの上ないのは昨年度と全く同じであったし、クラスのメンバーもろくに変わっていない。何か大きな変化があるわけでもなかった。今まで通りであったのだ。

そんなわけだから、勉強に勤しもうとか帰宅部員から脱しようとかそういう向上心も芽生えるはずもない。ホームルームが終わればさっさと帰ってベッドの上に横になろうという残念な思考回路が組み替えられずに、そのまま機能しているわけだ。今日だってそうしたいという気持ちが相当程度あるわけだが、

「もう少し待ってねー」

という家庭科部部长にして唯一の部員、大島おおしま美里みさとの嬌声がそれを阻止する。

「全く……なんで俺がお前の書類整理に付き合わないといけないんだ。だって……クラスで暇そうな人といえば、恵けいくんしか思いつかなかったんだもん」

満月のように丸い瞳でじっと見つめながら言う美里。率直に言うと、美里はクラスではひときわ目立つかわい子なのだが、昨年同じクラスになった際に、席が近かったからという理由で無駄に親切にってしまったのがためか、妙に俺を頼るようになってしまった。

「やれやれ、今ここに残っているやつらはみな暇人だろ」

俺は廊下側の机にうつぶせになっている生徒数名を指差して言った。

「あの人たちはやり残しの課題をやっているみたいだから」

どう見てもそうは思えないがな。

「じゃあ……同じクラスの奴じゃなければ、いろいろ他にもいるだろ。例えば美来とか美来とか美来とか」

「お姉ちゃんは今部活だから！」

「じゃあ、小嶋先生は？」

「まさか」

「志島ししま」

「論外」

とこのような具合に、どうしても俺でないといけならしい。いい迷惑だが、「論外」のグループに分類されるよりはましかと思うと、付き合っただけの気にはなれる。

「それで、俺は何をすればいいんだ」

「えっとね……書類が書き終わったら、生徒会室までついてきてほしいの。今年度の生徒会長さん、何だかちよつと苦手なタイプで……」

要件があまりにもちつぱけすぎるのだが……。美里じゃなかったら、自分で行けと言っているところだ。

「それより、お前が座っている席、誰の席だ？ 名簿の名前も見覚えがなかったし……ダブった奴か？」

「え？ 聞いてなかったの……というのも愚問かな。転校生が来るんだよ。明日」

美里は小馬鹿にしたように言った。ああ、愚問だ。ホームルームの話など、ぐっすり眠って聞き逃していたさ。

「ふうん……それなら明日、席を勝手に使っでごめんなさいと謝っておけよ」

俺は冗談めかして言った。すると、美里はバカ正直にも、

「うん、分かった」

と頷いて笑う。本当にやりそうで怖いけど、面白いのでそのままにしておこう。

「書類できたー。それじゃ、生徒会室までついて来て」

「はいはい」

それにしても、転校生か……。そういえば小さい頃、誰か忘れたが、転校してこの街を去っていった奴がいたような気がするな。いや、気のせいか……。

第1話 校門前にて

美里に付き添った後はさっさと帰宅して寝た。そして翌朝、俺はいつも通りの時間に出発し、のんびりと学校まで歩いていく。

俺の高校は自宅から徒歩圏内にある。そんなに歩く必要があるわけでもなくて、自宅を八時に出れば始業時刻まで余裕をもって到着できるほどである。

しかし、時間に余裕があると分かれると、人間というものはどうしても時間にルーズになってしまうものではなからうか。少なくとも俺の場合はそうである。だから、最高の立地条件であるにもかかわらず、俺の登校はいつも時間ぎりぎりになってしまっている。ただ、予め断っておくが、俺は今まで遅刻したことが一度もない。あくまで到着が遅いというだけだ。

そんなわけで、今日もいつも通りの時間に校門前に到着したわけである。この時刻になると、校門前には教師も生徒もいないのが常なのだが、今日は珍しいことに、一人の女子生徒が立っていた。制服は俺たちの高校と同じで、背丈は俺より十センチほど低く、髪は黒のショートで、癖毛なのか一本だけ後頭部にピンと跳ねているのが特徴的だ。やや色白で端麗な顔立ちをしているが、ヴィーナスで喻えるにはいささか浴衣が似合いすぎる。

胸元のリボンが青なので、どうやら俺たちと同年らしいが、俺は彼女と出会ったことはなかったように思われる。彼女も俺のことは知らないだろう。

「あ……」

彼女は俺の姿に気付くと、鳩が豆鉄砲を食ったような表情を浮かべて声を漏らした。一陣の風が少女の前髪を微かに揺らす。

「よっ、おはよう」

俺は躊躇なく挨拶した。すると、彼女も我に返ったように

「は、はいっ……」

と言ってから挨拶を返す。どこか戸惑っているような様子が手に取るように分かるのだが、初対面ならそれも致し方のないことだろうか。

「どうかしたか？ 遅刻すれすれの登校なんて、いやに墮落的だな」
それを言うなら自分も墮落的な人間なわけだが、気にしたら負けだ。

「そ、それは……その……」

彼女は胸の前で人差し指同士を邂逅させながら口ごもった。

「訳ありか？」

「えっと……た、大した訳でもないのですが……」

何かを言いかけて彼女の頬がリンゴのように赤らんだ。

「……ごめんなさい！ 何でもありません！ 忘れてください！」

言いたくない理由らしく、目を閉じてやや強い口調で言うと、そのまま校門をくぐって走って行ってしまった。よく分からないが、とりあえず変わった奴だということ片付けておこう。

「……やば……」

腕時計を確認すると、俺も急いで教室に向かった。

第2話 転校生の少女

階段を駆け上っている最中にチャイムが鳴ってしまった。遅刻確定だが、それでも急ぐに越したことはない。褒められた行為ではないが、チーターのごとく廊下を走り、一組の教室の扉を勢いよく開いた。

「先生はまだだよー」

眼中に最初に入ってきた生徒、美里がプリントを配りながら能天気な声で言うので、一気に気合が抜けていくのが身にしてみて分かった。こういう時、漫画家なら俺がその場でへなへなと崩れ落ちていく様を描くのだろう。現実でそのようなことをする人を見たことはないが。

「おはよう。それにしても妙に騒がしいな。どうかしたか？」

元から騒がしいクラスではあったが、今日はいつもよりも話し声が多いので、少し尋ねてみた。すると、美里は軽いため息をついて

「はあ……恵くんは自分に関係ないと思ったことはすぐに忘れちゃうよね。転校生が来るんだって！ ほら、昨日話したでしょ」

と言った。

「そついえばそうだったな……」

俺は適当に返事をする、席について鞆の荷物を机の中に放り込んだ。

すると、美里はプリントを俺の机上に置きながら

「どんな子かな？ 名簿からするに、女の子みたいだよね……」

と聞いた。俺はプリントを見ながら

「俺は別にどんなやつでもいいけどな。それより……入学式も近いけど、新歓の準備とかどうだ？」

と聞き返す。美里は向日葵のような明るい笑顔を浮かべて

「うん、いい感じだよ。目指すは百人！」

と言った。

「百人はさすがにも無理だろ。どこぞのだんごでもあるまいし」

「気持ちだけ！ あっ、そうだ。明日の放課後ね、もし暇があったら家庭科室に来て。最近はずよココロネに挑戦してるの。味見して！」

あまりにも嬉しそうに言うので

「毒見の間違いか？」

と冗談をぶつけてみた。

「ひどいっ！」

言うまでもない返答で、美里はぷいと横を向いてしまった。しかし、

「まあ、行ってやるよ。美里の料理なら、安心して食べる」

と言ってやると、打って変わって

「ホント？ ありがとう！」

と満面の笑みを浮かべながら言うのだから、本当に分かりやすい性格である。なお、先ほどのお世辞っぱく聞こえる言い分は断じてお世辞ではない。美里の料理は一味する価値が十分にあるのだ。口にした新入生は、次の瞬間には家庭科部の入部届を出しているだろうな。

「ところで、何故にチヨココロネ？」

「うーんと……なんとなく……かな？ あっ、先生来たから」

美里は子猫のように小走りで自分の席まで戻っていった。それとほぼ同時に、教室の扉が開く。担任のお出ました。

「さて、それでは、今日は転校生を紹介するぞ」

教卓の上に、乱暴に名簿を置くと、廊下側に向かって手招きをする。クラス一同の視線が、入室してくる人物に集中した。これまで騒がしかったのが嘘のように。

入室と同時に、俺とその人物の目がピッタリ合う。その人物……いや、「彼女」は今朝出会った時と同じように、目を丸くして少し立ち止まった。俺はというと……啞然とするしかなかった。

第3話 イントロダクション

彼女が入り口で固まっているので、小嶋先生は困り果てたような表情を浮かべており、クラスの者たちも頭の上にクエスチョンマークを浮かべている。

「おーい」

先生が呆れたように言うと、

「はっ、はい。すみません……」

と言って慌てながら、彼女は教卓のところまで歩いていく。ここで教室がまた騒がしくなった。特に男子の声がうるさいのは気のせいだろうか。

しかし、先生は珍しく注意一つせずに、白のチョークを手にして黒板に文字を書く。いつものミミズの這うような字とは違って、妙に丁寧だ。授業中もこれぐらいの字で書いてほしいものだ。

「昨日言ったように、今日からこのクラスと一緒に学ぶことになる磯原潮莉さんだ。それでは自己紹介を頼もう」

先生に言われて、潮莉は丁寧にも一度お辞儀した後、話を始めた。あまり大きな声ではなかったので、クラス一同だんまりになって彼女の言葉に傾聴する。

「名前は先程小嶋先生に紹介していただいた通りです。都内の高校から転校してきました。まだこちらのこと……」

潮莉は言いかけて口をつぐんだ。そして、俺の方をちらりと見て軽く目を閉じると、

「……はい、正直言ってよく分かりません。ご迷惑をおかけすることもあるかもしれませんが、よろしくお願いします」

と一気に言い切ると、もう一度お辞儀した。東京か……随分と遠いところから引越してきたものだ。それにしても、妙に俺を気にしている。そんなに俺がこのクラスにいたのが意外だったか。

「席は阿宮恵……窓際のスポーツ刈りで目つきの悪い奴の後ろだ。」

そこ空いてるだろ」

先生は何のためらいもなく言った。酷い。誇張表現にもほどがある。俺より目つきの悪い奴は、このクラスなら何人もいるぞ。それに、窓際の席で男子は俺しかない。言いたかったただけだな。

「……はい」

しかし、彼女は否定することもなく頷くと、そのまま指定された席まで歩いていく。そして、俺の席の隣で立ち止まると、小鳥のさえずりよりも小さな声で、

「……初めまして……ではありませんね。数分ぶりです。これからもよろしく願います」

と囁いた。仮初めにも顔を知った人物がクラスにいたことに対してかは知らないが、潮莉は安堵の表情を浮かべている。

「あ、ああ……よろしく」

そう返すと、彼女はこくりと頷いて、自席に座った。彼女の荷物を弄う音が聞こえる中、小嶋先生の話は続いていく。窓の外を見ると、少し雲行きが悪くなっていた。そういえば、天気予報で雨が降ると言っていたか。

第4話 群れる生徒たち

ところで、転校生が来たとなると、妙にはしゃぎだす生徒がいるというのは、いつの時代でもどこの世界でも変わらないことなのであるうか。まさかそんなことはあるまい。

「ねえ、好きな食べ物はなに？」

「こっちの気候はどう？」

「運動は得意？」

「今度デートしようぜ」

「結婚してください！」

一部変な輩が混じっているが、そんなことはどうでもよい。とにかくうるさい。今日は、休み時間と授業中との温度差がありすぎて困るほどだった。そして、放課後もこの有様だ。

「恵一ー、お前も何か話せよー。せっかく席が近いんだしさ」

中学からの悪友、志島和希かずきが軽い口調で話しかけてきた。俺と同じスポーツ刈りだが、こいつの方は結構な癖毛で、今もところどころサボテンの針のようにツンツンしているという特徴がある。ある意味、そういうのがなければ、普通の男子生徒が髪型だけで個性を出すのは難しいとも思っただが。

「興味ない」

俺は無愛想に返す。その、席が近いゆえに迷惑しているのだしな。「全く……そんなだから落ちこぼれるんだぞ」

「お前の方がひどいだろ。それに一人の女子生徒に話しかけるか否かが学績に関係するなど初耳だな。参考資料を挙げてみる」

「知るか」

俺の冗談に対し、志島はつまらなそうな表情を浮かべながら言った。

「……それよりお前こそ何か話さないのか？ ああ、なるほど。お前自身が参考資料だったか」

「うるさい！ 待っているんだよ。他の奴らがどこかに行くまで。大人数で押しかけても疲れさせるだけだろ」

慌てて言う彼の言葉に、俺はにやりとした。そして、

「ほう、それでその疲れたところに追い打ちをかけるわけか」と言った。

「こいつむかつく！」

握り拳を作りながら、乱暴に言う志島。少々からかいすぎたか。

まあ、謝る気は寸分もないがな。

「あー、そんなに言うなら、今から話しかけるぞ！ 俺が参考資料程度ではないことを証明してやる！」

そう言い、志島は渡り鳥のように群れる生徒たちを押しつけて行くとした。しかし、その生徒たちに追い出され、俺の目の前で尻餅をつくのであった。

「やはり参考資料程度でしかなかったわけだ」

「やっぱりこいつむかつく！」

結局生徒たちの群れが潮莉の前から姿を消すまで、あと十五分も待たねばならなかった。それまで志島が暇そうな表情を浮かべながら、指で器用にシャーペンを回していたのは言うまでもない。

第5話 サボリ部員

質問攻めの後で、少々お疲れ気味の潮莉。それにも躊躇なく、志島は話しかけた。

「おーっす」

随分と軽い奴だなと思われたことだろう。潮莉も首を傾げていたが、

「えっと……こんにちは……」

と苦笑しながら返した。

「俺は志島和希。そんでもってこいつが、無愛想なことでも有名な阿宮恵一だけ」

志島は俺の肩を持ちながら言う。

「おい、俺は別に……」

と言いかけたが、

「和希さんに……恵一さんですね。こちらは磯原潮莉です。よろしくお願いします」

とあまりに丁寧にお辞儀して言うので、俺は口ごもってしまった。微笑むその表情は、実に清々しい。

「俺らのクラスはいつもこうなんだよ。最初のうちはちょっと疲れのかもしれないけど、ぼちぼち慣れていったらいいぜ」

志島が言うと、潮莉は小さく頷いた。少し戸惑っているのか恥ずかしがっているのかよく分からないが。

「……という前置きはさておき、しおりんって結構めんこいな。転校する前もモテたんじゃねえの？」

と言う志島を前に、潮莉は頬を赤くした。

やれやれと思いつながら、俺は志島を小突いてやる。すると、志島は頭を押さえながら、俺を睨んだ。

「いてえ！ 何で叩くんだよ！」

「お前が勝手に変なニツクネームをつけるからだ。それに、叩いた

んじゃない。小突いただけだ」

「俺が痛いと感じたら、それは叩くという行為に分類されるんだよ！」

志島は俺の襟ぐりを掴みながら迫ってきた。不意に横を見ると、潮莉が何か言いたそうな表情をして、俺の顔を見つめている。

「どうかしたか？」

俺が聞くと一言。

「いえ……ただ、その……仲がいいんですね」

俺と志島は互いの顔を見合わせた。

「まさか！ 油と水ぐらいに仲が悪いから！」

「そんなことはねえよ。水と油ぐらいに仲が悪いぜ」

ほぼ同時だった。わずかに志島の方が早かったような気がするが、陸上競技のゴールの着順ぐらいに微妙な差だと思う。

すると、潮莉は口元に手を当てながら、必死で笑いを堪えていた。

「やっぱり……仲いいですね……」

彼女の言葉を聞いて、俺は落ち着いてもう一度志島の顔を見た。

志島もまた、俺の顔を見ていた。

「……そうかも……しれないな」

「……まあ、しおりんがそう言うなら、そういうことにしておくか」
俺たちも笑った。

すると、教室の扉が勢いよく開き、ジャージ姿のツインテール少女が君臨する。背景に地獄絵のごとく紅蓮の炎が燃え盛っているような気さえた。

「和希ー！ あんたねえ、やっぱり教室で油売っていたわね！ さつさと来なさいよ」

彼女は強い口調で言った。志島は大慌てで潮莉の後ろに隠れるが、構わずに俺たちの方に近づいてくる。

「……あんた、名前は？」

彼女は潮莉を指差して言った。

「ひえ？」

青ざめたような表情を浮かべる潮莉。まあ、開口一番にこれでは無理もない。実際に俺もそうだったからな。

「名前がないと呼べないでしょ。ほら」

「えっと……潮莉……です。磯原潮莉」

蚊の鳴くような声で潮莉が言っていると、ツインテ少女は少しだけ表情を和らげて笑った。

「そう、いい名前ね。それじゃ、潮莉ちゃん。そこをどいて。あたしはこの和希に用があるの」

「え？」

潮莉がちらりと和希の方を見た。和希は全力で首を振っている。

このままでは埒が明かないと悟った俺は、潮莉の耳元でこう囁いてやった。

「陸上競技部屈指のサボリ部員、志島和希を庇ったところで、何の利もないぞ」

「えっ……そんなサボリなんですか？」

「ああ、実際に昨日も一昨日も無断で不参加。……あと、大島美来って名前なんだけどな、こいつが怒るのも無理はないってわけ」

「そ………そうですね………」

潮莉は小さく頷いて椅子から立ち上がると、子犬のように軽快に俺のそばに移動した。志島は口をあんどくり開けて、ただただ美来を見つめている。自業自得だ。

「………さあ、来なさい」

「くっ………恵一………俺はここまでだ。………どうかこの剣であのメデューサを断ち切ってくれ………」

俺の方を向いて、上手さのかけらもない演技をする志島。もちろん俺は

「嫌」

と即答。というか、メデューサってどうせ美来のことだろうが、火に油を注ぐような真似は控えた方がいい。

「はあ………石化したいのなら、いつでも石化させてあげるから、と

りあえずこつちに来なさい。もうすぐ新歓なのよ。あんたもちゃんと部活に出てかっこいいところ見せなさい」

美来は呆れ気味に言った。すると、志島もしぶしぶ彼女のほうに歩いて行く。

「くそう……」

まだ嫌そうな表情を浮かべていたが、媚を売るような甘い口調で「……あんたがかっこいいところ見せたら、一年の女子も十人ぐらい入部してくれるわよー」

と美来が言うと、一瞬で表情を明るくし、

「何だと！ こうはしてられないぜ！」

と言い、美来を置いて猛ダッシュで教室から出て行った。

「ホント単純ね……。まあ、潮莉ちゃんもあいつには惚れない方がいいわ。うーん……悪い奴じゃないんだけどね、結構苦労はさせられると思うから。それじゃ」

美来もそう早口で言うと、志島を追っていった。まだポカンとしている潮莉に、俺は声をかけた。

「はは、ちょっとびっくりしただろ」

「はい……でも……なんとなくですけど、いい人そうでした」

戸惑いながらも言う潮莉。

「否定はしないな」

俺はそう言って鞆を持ち、ゆっくり席から立ち上がった。

「どちらへ？」

「帰る。それだけだ」

第6話 ハズレルート

教室を後にしようとしたが、

「……恵一さん」

と俺を呼ぶ潮莉の声を聞いて、振り返った。彼女もまた、手に自分の鞆を持っていた。

「なんだ？」

と聞くと、

「あの……」

潮莉は一呼吸置いて

「恵一さんは部活とかはやっていないのですか？」
と尋ねた。

俺はしばらく黙り込んでしまったが、

「ああ、やっていない」

とだけ答えた。すると、潮莉は口元に軽く手を当てて、

「ちよっぴり……残念です」

と一言。俺は彼女が何を言いたいのがよく分からなかったが、いやにしょぼくれた顔をしていたので、こう言ってみてやった。

「まあ、どうせ暇だし、校内の案内でもしてやるつか？」

「いいん……ですか……？」

胸元に手を当てて、遠慮がちに言う潮莉。

「もちろんだ。……あ、あーと……そういうえば、美里の奴、今日の放課後に来てほしいとか言っていたな」

「美里さん……同じクラスの人ですよ。今朝のホームルームの後すぐに話しかけに来てくれました」

潮莉は微笑んで言った。まあ、ホームルーム直後、俺は机にうつ伏して、睡眠学習を開始する準備をしていたから、何も聞いていなかったが、既に会話済みだったのか。

「それで、何か謝っていらっしやったのですが……よく分からなか

ったです」

マジで謝っていたのかよ。

「そ、そうか。それなら話は早い。そいつは家庭科部なんだが、コッペパンの試食をしてほしいらしい」

「コッペパン……ですか？ ……といいますが、そんな大事な約束、忘れちゃだめですよ！」

潮莉は顔を赤くして強い口調で言う。そんなに大事なことか？

と内心思いつつも、俺は彼女の頭を撫でながら、

「はは、そうだな。悪かった」

と言った。しかし、全く悪びれていない風だったのが、余計に潮莉には不快だったらしい。

「待たせてはまずいです！ 早く行きましょう！」

と言い、俺の手を引っ張って教室を出ていき、そのまま階段を下りて行った。

「おいおい、家庭科室の場所、分かってるのかよ」

「分かりません」

おい、こら。

「でも、何となくこの棟の一階西隅にある可能性が高いと思います」「そうなのか？」

「そうです！」

残念ながらハズレだが、面白いのでそのまま付き合ってやることにする。

「ところで恵一さん。美里さんと美来さんってもしかして……」

ややしんどそうな口調で、しかし、走る速度を緩めることなくいう潮莉。

「今更気づいたか？ しかも、双子だぞ。美里が妹で美来が姉。性格は正反対だな」

俺も我ながら律儀すぎると思うが、返してやる。

「……羨ましいです。わたしもお姉ちゃんがいてほしかったです……」

……」

急に立ち止まって、噛み締めるように言う潮莉。俺も合わせるように足を止めた。

「……もし生まれ変わることができればなら……わたしはお姉ちゃんがこの世界にいる未来を望みたい……です……」

潮莉は窓の外を見つめている。その先には、黒雲と黒雲の間に隠れかけている太陽が、弱い輝きを放っているのが見えた。

「……恵一さんは、何を望みますか？」

潮莉は俺に聞く。何とも言えない雰囲気、俺は話を振られないといいなと思っていたのだが……。

「……そうだな……」

思索する俺を真剣な眼差しで見つめる潮莉。俺は一気に言い切った。

「俺は何も望まないな」

「……それが……最高の答えですね……」

潮莉は小さく頷いて、にっこり笑う。適当に言ったただけだが、潮莉には満足だったらしい。

「行きましようか」

「そうだな」

俺たちはまた走り出した。そういえば、今向かっている先は家庭科室とは全く別物の教室だったな。こいつの反応が楽しみだ。

第7話 ばらまいてしまった

「はあはあ……」

息切れしながらもようやく辿り着いた「一階西隅」が第一化学室であつたという事実を知って、潮莉はどう思ったことだろうか。

「……外しました……」

異臭の漂う教室の前で肩を落としていた。……と、ちょっと待て！なぜ異臭が漂っている！？

「どうかしましたか？」

「いや、どこからどう見ても、この臭いは異常だろ。分からないか、潮莉？」

俺は慌てて言うが、潮莉はただ首を傾げているだけだった。

「化学室というのは、こういうものではないのですか？」

「……お前の前の高校の化学室を覗いてみたいよ」

「覗き見は駄目です！ 女の子に嫌われますよ！」

冗談かどうかは知らないが、また顔を赤くして怒る潮莉。少なくとも俺には、お前の考えているような最悪な行為をする意図は全くない。志島なら分からないが。

「やれやれ……それじゃ、今ここに漂っている臭いが何によるものか、二十五文字以内で説明してくれ」

俺はため息をついて言った。すると、潮莉は小さく頷くと、

「中で実験中らしいが、失敗した模様」

「ですます調がこいつのデフォではなかったのか？」

「……」

俺の疑問を含めた視線にもかかわらず、潮莉はもの一つ言わない。目を逸らすこともしないのだ。

「……どうした？ 口調がおかしいぞ」

「以上」

「はい？」

「……さっきので、漢字に直さずとも字数制限は満たされるはず」
なるほど、ですます調ではなかったのは、字数稼ぎのためだったか。いや、そんなことはどうでもいい。

「律儀に従ってるんじゃないやねえ！ 字数制限なんかどうでもいいんだよ！」

「ダメです！ 字数制限は守らないと、零点になってしまいます！」
試験の話有谁がした！

しかしまあ、とりあえず、こいつは変わった奴だということを確認することはできたわけだ。いや、無駄に真面目な奴という方が正確だろうか。

そんなことを思索していると、部屋の扉ががらりと音を立てて開いた。そこには盛大に咳き込む女子生徒の姿があった。

背丈はたぶん潮莉と同じくらい。髪型は左サイドテールで、やや垂れ目なのが特徴か。あと、目には黒縁の眼鏡をしている。

しかし、ぼろぼろになった制服は何ともいえない不気味さを放っている。どんな美形な人も、白骨化したら不気味ではないか。実際に、浅間山の噴火で石段が埋まった観音堂で発掘された白骨死体も、実は女性で、なかなかの美女であったというが、あのさまであった。それと同じだ。

「……ごほんごほん……大失敗をしてしまった」
「だ、大丈夫ですか？」

潮莉が不安げな表情で、その女子の顔を覗き込む。

「……大丈夫だ。問題ない。それより、君は誰？」

「わたし……ですか？ わたしは磯原潮莉です。今年度からの転校生です」

顎に手を当てて、潮莉の顔を見ると、何かを理解したかのように深く頷くと、

「ぼくは新島静美にいじま しずみという。下の名は静内の『静』に美瑛の『美』だ。化学部の部長をしている」

と言った。「静」の名前の割には、ぶっ飛んだことをやらかしているようだ……。

「……北海道の出身ですか？」

「察しがいいな」

自己紹介に北海道の地名を使ったら、誰でも勘付くだろうよ。というか、潮莉ももつとほかに聞くべきことがあると思うのだが。

「ぼくは四年前に北海道から引越してきたんだ。そして、それから四年間、ずっと化学部に所属して実験に徹してきた」

「すごい……ですね……」

潮莉はいやに感動しているのだが、俺は北極と南極がポジションチェンジでもしない限りは感動できなかった。実際にこの悪臭は、その実験によって生み出されているものだからな。

「ぼくのすごさを分かってくれるとは、実に嬉しいことだ。感謝する」

静美はさぞかし感慨深そうに言うと、今度は俺の方を見た。

「君は？」

「俺か。俺は阿宮恵一。それより、この臭いはなんだよ」

静美は眼鏡を外すと、

「なんのことだい？ どこから臭いが漂ってきているんだい」

お前の服からもな。

「……………わ、わたしもそれは思いました……………」

言いにくそうに潮莉が言うと、静美は

「そうだな……………ぼくも分かっているさ。先ほどの失敗のせいだね。

おかげで、試験管を一本ダメにしてしまった」

と言うのだ。素の表情のまま。

「おいおい、弁償しなくていいのかよ」

というか、一本で済んだのか、本当に。

「弁償？ ああ、それなら大丈夫だ。問題ない」

静美はなんの悪びれもなさそうに言うと、懐から札束を取り出し、床の上にばらまいた。ぱつと見た限りでは数十枚ある。

「おっと、ばらまいてしまった。どうしようか……」

「あ、え、え、えー！」

潮莉は狼狽する。当然だろう。俺もそうなのだから。

「……さて、ぼくは先生を呼んでくるよ。君たちはややこしいことに関わりたくなければ、その札束を持って退散するんだ」

静美はそう言い捨て、走って行ってしまった。

「……これ、おもちゃの札束ですね」

潮莉は札束の内の一枚を拾い上げて言った。

「どれどれ……本当だな……」

確かに普通の紙幣よりも厚く、そして、小さかった。なにより、本来ならば「日本銀行」と書かれているべきところが「日本子供銀行」となっている。

安堵したのか、潮莉は軽くため息をつく。

「はあ……無駄に神経使いました……。……それより、なんで家庭科室まで行くだけなのに、こんな道草をしているのでしょうか……」

「それはお前のせいだ」

「そうでした……。ごめんなさい。やっぱり最初から案内してもらえばよかったです」

潮莉はしゅんとした。

「そうせずに楽しんでいた俺も悪いけどな」

慰めにもならないだろうが、とりあえず言ってみる。まあ、実際には楽しむどころか、どっと疲れが溜まったのだが。

第8話 約束はすり替わるもの

「別の棟の一階西隅だったのですね……。惜しかったです……」
俺の案内のもとに、目的地に無事到着した潮莉は、しゅんとして言った。

惜しくもなんともないぞ。むしろ、行列の行と列を逆にしたのと同じくらい致命的なミスだと思う。

「まあいい。昼もまだだったことだし、ご馳走になるか。まあ、ご馳走になるほどおいしいかは知らないがな」

俺がそう言っつて、家庭科室の扉を開けると、味噌汁の美味しそうな香りが漂ってきた。それから、美里の歌声も聞こえる。あまりにも予想外すぎたので、思わず情けない感動詞を発しそうになる。

「ラララ……へ？」

その直後、拍子抜けしたような美里の声が聞こえた。エプロン姿であり、クマさんの柄が印象的である。

「な、なんで？ なんで来たのー？」

美里はお玉で俺を指しながら、驚愕の声を上げる。

「それは失礼じゃないか。わざわざお前のコッペパンを試食しに来たんだからな」

という俺に続き、潮莉も

「わたしも来ました」

と言った。

美里は困ったような表情を浮かべて、一步後退した。

「あのー……今日じゃなくて、明日って言ったと思うんだけど……。それにコッペパンじゃなくて、チョココロネ！」

「は？ 今日言っていたじゃないか」

「はあ……わけわからないよ……」

「だから、コッペパンを一つ要求したい。わざわざ毒見……あ、いや、試食しに来てやったんだからな」

「毒見つて言ったー！」

俺と美里のつまらない喧嘩を見ていた潮莉は、しばらく黙っていたが、やがて口を開く。

「あの……さっきの歌は……」

「ん？」

美里は彼女の声に気付いて、にこやかな笑顔を浮かべた。

「おー、知っている人がいるなんて、思わなかったなあ」

「い、いえ、知らないです……」

打って変わって、落胆する美里。潮莉は慌てて

「で、でも、いい歌だなあと思いました……」

と付け足すと、美里もすぐに笑顔を取り戻した。

「だよなー。だのに、恵くんなんてひどいんだよ！ 典型的な昭和ソングじゃねーかとか、そんなこと言うの。立派な平成ソングですつて言いたくなるよ」

話がずれていく。

「あ、それより、美里さんはここで何をされていたのですか？」

と思つた矢先に、潮莉が核心に少しだけ近づいてくれた。

「え、あ、いや、その、えと、あと、うんと、えーとね、えーと、

何を言おうとしていたんだっけ？ えーと、あーと……」

言いたくないことらしいな。いずれにせよ、コッペパンの用意はできていなかったということか。

「コッペパンの代わりに、味噌汁にされたんですか？」

「え？」

美里はしばしの沈黙の後、小さく頷いた。

「……………違うの……………。これ、わたしの昼食……………だよ……………」

美里は言つて頬を赤く染めた。

「へ？」

潮莉の素っ頓狂な声。

「ふむ、要するにだ……………こいつは昼食の弁当を忘れてしまったから、家庭科室を勝手に使つて昼食を作っていたわけだ」

俺のとどめの一撃！

「うー、恵くん……無駄に鋭い……」
目をウルウルさせながら言う美里。

「あ、でも、それじゃ……」

潮莉はまだ追及するつもりか？ 鬼畜だ……。

「えっと……パン作りは明日。今日はその準備をするだけだから。ごめんね、恵くんって忘れん坊だから、今朝の約束も忘れちゃってみたい」

あれ、俺の方に矛先が……向いてきている？

「忘れちゃってたというよりは……内容がすり替わっていたという方が……」

「そうかもねー。まあ、そういうわけだから、わざわざ来てもらったのにごめんね。明日の放課後にまた来てくれたら嬉しいな」

潮莉は元気よく

「はい」

と返事すると、手を振りながら家庭科室から出て行った。俺も急いで彼女の後を追う。

「誤解は誰にでもあります」

潮莉はにつこり笑って言った。意外と寛容な返事だったので、俺は驚くしかなかったのである。

「それよりも……」

潮莉はリンゴのように頬を赤くして

「お腹が……空きました……」

と言って俯いた。俺は潮莉の頭の上にそっと手を置き、

「俺もだ。食堂で良ければ案内する」

と言った。

「お願いします……」

潮莉は俺の手を除けながら、ぺこりとお辞儀した。

第9話 食堂でお別れ

無事食堂到着。それまでは、通りすがりの生徒と軽い挨拶を交わしたり、途中の教室を紹介したりしていたが、潮莉も楽しそうに会話に参加したり、教室の中を覗いたりしていた。楽しんでもらえたようで何よりだ。

「さて、何を食う？」

「そうですね……」

潮莉は口元に手を当てて考える。

「まあ、時間が時間だから、ひよっとしたらあんまりいいの残ってないかもしれない」

「構わないです」

と言つて、潮莉はメニューを凝視し始めた。率直に言つと、俺たちの高校の食堂は、かなり質素なものしか提供していない。都内の私立なら、もっと豪華なメニューばかりだったと思うと、少し不憫だ。

「結構おいしそうです」

「は？」

潮莉は素敵な笑顔を浮かべながら言った。俺は拍子抜けしてしまふ。

「こんなの……で？」

「いえ、前の高校の方がメニュー少なかったです。……というより、パンしかありませんでしたし、数もこちらの方が多いです」

潮莉は嬉しそうに言った。

「あ、いえ、パンが嫌いというわけではなくてですね……むしろパンは好きです。大好きです。ほっぺた落ちます」

そんな補足が聞きたいわけではないのだが……。

「公立だったのか？」

「はい、そうですよ。どうして私立だと思われたのですか？」

俺の方が逆に聞かれてしまった。東京といえば、私立というイメージしかなかったという俺の偏見を述べるのも気が引けたので、沈黙を保つことにする。

「……無理を言っただけ公立に通わせてもらっただけです。昔から親には……お金の面ですごく迷惑をかけていたんで……」
と言っただけ、潮莉はにこりと笑う。

「……そうか……」

俺はそうとしか言えなかった。彼女の言葉を的確に理解できていなかったからかもしれない。しかし、仮に理解できても、俺には返す言葉を選べそうになかったのだ。

「……恵一さんのおすすめメニューって、どれですか？」

「うん？ 奢ってやる。何がいい？」

俺が言っただけ、潮莉は眉をひそめた。

「そんなこと言っています！ 何がおすすめてかって聞いただけなんです！」

「いや、だから……」

俺は続きを言おうとしたが、背後の妙な威圧感に口をつぐむ。次の瞬間、俺の頭に鉄拳が炸裂していた。

「ぐおお！」

「こら！ しおりんを苛めるんじゃないねえ！」

志島だった。

「苛めてねえ！」

「苛めてた！」

「苛めてねえ！」

言い合いが始まる。実に醜いと我ながら思う。

「あの……」

「ん？」

潮莉の声に志島が彼女の方に視線を向けた。

「べ、別に苛められていたわけじゃないです」

「へ？」

拍子抜けしたように言う志島。

「……それよりも……後ろ……」

潮莉が気まずそうに志島の後方を指差すので、彼も思わず振り返った。そして、一瞬にして青ざめる。

「ミーティングの最中に抜け出すなんて……どういう性格してるのよー！」

仁王立ちする陸上部部長の美来。いつものツインテールがポニールに変わっているところを見ると、つい先ほどまで練習をしていたのだろう。

「全く……今日は雨が降るから、練習をぱぱと済ませて解散にしようと思っていたのよ。それなのに、あんたが逃げ出すから……」
ぎろりと睨む美来。女子生徒ながらかなりの迫力だ。シマウマの群れも一瞬で散り散りになるだろう。

「部活動は集団行動。一人でも和を乱す者がいたら、その部はその人の分だけ駄目になっちゃうの。分かってる？」

美来に指差されてびくびくしている志島。先ほどの威勢はどうした。

「……あら、あんたはついさっき出会ったばかりね。……潮莉ちゃんだったかしら」

美来は今更に気づいたように言う。

「はい」

潮莉もにこりと笑って頷く。何だか頼もしい人を見るような目だ。こいつのことを信頼したのか。

「あんたからも何か言っちゃって」

「へ？ あ、えーと……その……」

急に振られて慌てふためく潮莉。

「こら！ 転校したての子を困らせるんじゃないよー！」

志島が突然声を張り上げる。美来はしばらく彼の目をじっと見つめていたが、納得したように頷いた。

「珍しくあなたにしては正論ね。ごめんね、潮莉ちゃん」

「いえ……お気遣いいただきありがとうございます……」

美来は優しく微笑むと、志島の首根っこを掴み、

「なるほどね……こいつ、どうやらあんたと話したかっただけみたいね」。でも、もう十分話したから、満足よね」

とわざとらしく言う。

「ひ、ひいー」

志島の断末魔が響き渡った。食堂にいた数名の生徒が一斉に彼に視線を集中させる。しかし、すぐにテーブル上の食べ物の方に視線を戻した。

「阿宮、あんた、その子を案内してあげていたの？」

美来は志島を廊下に押し出してから言葉を発する。

「ああ」

「そう……あの子にしてあげたように、その子もクラスに早く馴染ませてあげて」

「もちろんだ」

美来は軽くウインクをすると、食堂から退散した。潮莉は俺たちのやり取りをポカンとして見つめていたが、彼女を出て行ったのを見て控えめに俺の方を見る。

「そういえば……傘持っていないです……。急いで帰らないといけません……」

俺が窓の外を見ると、いよいよ雨が降りそうな空になってきている。

「……濡れて帰ったら……えっと……家で叱られます……」

潮莉はそう言って頭を下げる。俺は少し考えたあと、

「分かった」

と答えていた。

「……お先に……失礼します……」

潮莉はぺこりと丁寧にお辞儀をし、大急ぎで食堂を出て行った。

周りに食事中の生徒がいるのに、なぜか一人この場に取り残されたような気がして、少し寂しかった。

第10話 謎

一人でコッペパンをかじりながら、窓の外をふと見る。聞こえる激しい雨音と一緒に、幾重もの水滴の軌跡が眼に映る。

あいつ、濡れて帰ったら叱られるとか言っていたな。なかなか厳しい家庭なのかもしれない。確かにあいつ自身、なかなか細かいことにつるさいところがあるけれども、それも親の教育の賜物だと思えば、納得するのも容易だ。

しかし、本当によく降る。春の通り雨だろうか。それなら、待っていればすぐに止むのだが、美来が練習を早く切り上げようとしていたことを見ると、そうでもないらしい。もう少し天気予報をよく見ておけばよかったなと、少しだけ後悔する。

そんなことを考えていると、不意に食堂の扉が開いた。制服姿の美来がそこには立っていた。

「お前、どうしたんだ？」

俺は思わずかじりかけのパンを置いて、美来のもとに駆け寄る。

彼女は苦笑いしていた。わざわざどうしてここまで戻ってきたのだろう。そのまま帰ればよかったのに。

「やっぱりまだいた」

「ん？」

美来は俺のテーブルまで歩いてくると、椅子を引いて座った。

「潮莉ちゃんに一人で帰らせたのね」

美来は言った。

「あ……ああ……」

小さなため息。

「家まで送ってあげたらよかったのに」

「……そう……だな……」

美来は少しだけ怒っているようだった。

「……まあ、今回はそれでもいいわ……。それより、あたしね、あ

の子に傘を貸しちゃったの」

「うん？」

俺が首を傾げると、

「察しなさいよ！」

と声高に言う。

「相合傘しろと？」

俺が笑いながら言うと、

「バ、バカ！ バス停までなんだから！ 分かっていると思うけど
！」

と頬を赤らめる美来。終いには顔を逸らしてしまった。

「分かった」

と俺は言い、残りのコッペパンを袋に詰め込むと、美来を置いて
食堂を出て行った。

「待ちなさいよ！」

美来も追いかけてきた。それから、下駄箱で下靴に履き替えると、
折り畳み傘を開く。最初、彼女は恥ずかしそうにしていたが、意を
決したかのように中に入ると、傘の柄を無理やり奪った。

グラウンドはすっかり水浸しになってしまっている。それを残念
そうな表情で見ながら、美来は俺に声をかけた。

「潮莉ちゃん、徒歩通学らしいわ」

「そうか」

「それで……どうせバスの時刻まで時間はあるし、家まで送ってあ
げようかと思っただのよ」

「そうか」

俺の相槌を聞いて、美来は口をつぐむ。

「……でも、すごい勢いで断られちゃったわ。なんでだろ……」

「……そうか……」

「あたしだから？ ……って聞いてみたの……」

俺は美来の言葉をただ傾聴していた。

「いいえ……だって……。全然分からない……」

「……家を見せたくない……ということか……」

「……かもね……」

俺には潮莉のことなんて何一つ分からない。今日出会ったばかりなのだから。しかし、まだ彼女が俺たちに完全に心を開いてくれているというわけではないのであれば、それは悲しいことだと思った。「傘は明朝八時に校門の前で返します……って言っていたわ。それから、すごく感謝してくれた……」

「そうか……」

俺は相槌を打つしかなかった。いつになく寂しそうな表情で言う美来を見るのが、俺には少し辛かった。

「まだ初日だし、あいつも思うことがあるんだろ。また明日、仲良くしてやるうぜ」

「そう……そうよね！」

バスに乗る美来に声をかけると、元気のよい声が返ってきた。少しだけ気分が晴れたようだ。バスを見送り、俺もそのまま帰宅した。俺の気分の方は、残念なことに空の色と同じままだった。

第11話 言いたくないこと

翌朝は快晴。道の上には水溜まりがいくつもできていて、昨晩中降り続いた雨の痕跡を残していたのだが、空は雨など降っていないかったかのように青く、美しかった。

俺は少しだけ早く家を出た。何となく、美来のこと、それから、潮莉のことが気になったからだ。確か八時に校門前で会うと言っていた。間に合うだろうかと腕時計を常に気にしながら、珍しく走って登校する。

この時間帯に俺がいるのはどうやら珍しいらしく、同級生の顔見知りの生徒にはからかわれたりしたが、そのようなことは今は全く気にならなかった。ただ、がむしゃらに走っていたのだ。

校門が近づいてきた。話し声が聞こえる。二人の女子生徒の声だ。それが美来と潮莉のものだということに気付くまで、一秒も必要なかった。

「昨日はありがとうございました。そして……ごめんなさい……」
「いいの。誰にだって話したくないこと、見せたくないものはあるわ。あたしにもある」

「ご配慮ありがとうございます……。今はまだ言いたくないんです……。自分でもまだ気持ちの整理がついていなくて……」
俺は隙を見計らって、二人の前に顔を出した。

「……あ、恵一。こんな時間にどうしたのよ？」
「おい、お前もそんなこと言うか？ この時間に俺がいたらまずいか」

二人は驚いていた。特に美来に至っては、まるで鶴を目撃したかのような表情を浮かべているものだからひどい。この学校は、失礼な奴が多いのかもしれない。

「ところで、午前中授業は今日までね」
美来が唐突に話を替えてくる。

「ああ、そういえばそうだったな。嫌だな……」

「どうしてですか？」

潮莉が首を傾げて尋ねてきた。

「いや、だってさ……」

授業が退屈だから……と言いかけて口をつぐんだ。ほとんど初対面に近い相手だ。印象を悪くしたくない。

「……帰るのが遅くなるじゃんか」

「……それもそうですね」

潮莉の沈黙が少々痛かった。絶対に見透かされていたな。まあ、途中黙り込んだ俺のせいだが。

「まあ、一理あるわね。あたしの場合だと、部活もあるから、帰りは毎日六時になっちゃうし」

美来が言うと同時に、北風が俺たちの周囲を巡ってゆく。女子二人の髪をゆらゆら揺らしながら。

「はあ……まだ寒いわね」

手を腰元に当てながら言う美来。

「まあ、そのうち暖かくなるさ。我慢だ」

俺はそう言っ、美来の肩を軽く叩いた。

「ちよ！ 勝手に触らないでよ！」

美来は俺の手を弾く。潮莉はおどおどしながらその様子を見守っている。

「べ、別に触られるのが嫌って言っているわけじゃないわよ……。ただ……気もないのにそうやって慰めてたら……ちよっと期待させちゃうでしょ！ 教訓みたいなものよ」

美来は赤面して言った。相変わらず素直じゃない奴だ。

「じゃ、あたしは先に教室に行ってるから、あんたは潮莉ちゃんと教室まで行きなさいよ。あと、嫌らしい男子が近づいてきたら、容赦しないこと。ほら、転校したてなんだし、バカな男子は寄ってくるわ。いいわね！」

なぜおまえに指図されなければならぬという質問は愚問か。

「嫌らしい男子なんか近寄ってこねーよ。それだったら、俺も嫌らしい男子の一人じゃないのか？」

「あたしは今日日直なの。しょうがないからあんに任せてあげる。まあ、あんなら大丈夫でしょ」

「ほう……」

俺はにやりとして潮莉の頬をギュツと引っ張った。柔らかい頬つぺただ。潮莉は可愛らしく

「ひゃっ……」

と言つて目を瞑った。

「あんなね……あたしをからかいたいの？」

美来は俺を睨みながら言う。

「悪い……」

俺は潮莉から手を離し、謝った。すると、美来は小さくため息をついて、

「あんたも大丈夫じゃないような気がしてきたわ……」
と頭に手を当てる。

「まあ、変なことしてきたらあたしに言えばいいわ」

「は、はい……」

美来は納得したか知らないが頷いて、校舎の方に走って行った。

「なあ、潮莉」

俺は尋ねた。

「なんですか？」

「……家のこと……俺にも話せないのか？」

潮莉は俺の顔を見て俯いた。そして、小さな声で言った。

「恵一さんには……余計に話せないです……。話す……きつとわたしを……」

そこから後は聞き取れなかった。いや、彼女がわざと言わなかったのかもしれない。いずれにせよ、潮莉にとって、家のことは余程触れてほしくない事情だということだけは間違いないらしい。

「分かった。じゃあ、お前が話せるような時が来たら、お願いする

「ぜ」

「ありがとうございます……。そ、それ以外のことでしたら、なんでもお答えします……。その……た、体重……でも……」

潮莉はそう言っで頬を赤く染めた。おそらく無意識的であろう上目遣いをかわいいと思っでいる俺がいる。

「そんな失礼なことはしない。それじゃ、教室まで行くか」

「……はい」

教室に行く途中で、バカー名と遭遇したので、それを撃退した。

美来の危惧していたことが現実になり、俺は責務を果たした。ただそれだけであった。

第12話 部長の悩み事

「恵ー！ なんでいきなり叩くんだよ！」

教室で志島と口喧嘩。心なしか普段に増して寝癖がひどい。

「いや、美来に言われていたからな。嫌らしい男子が近寄ってきたら撃退しろとな。それに俺は小突いただけだ」

「俺、何もしてねえ！ それに、俺が痛いと感じたら、それは暴力に分類されるんだよ！」

潮莉は困った表情で、いつも通りの俺たちのやり取りを見守っている。おそらくこの光景もいずれいつも通りのものになるのだろう。

「またやってるー」

騒々しい男子二人の声の間に能天気な女子の声が挿入される。

「あ、美里さん」

「おはよー。それよりお二人さんはまた喧嘩？」

「そ、そのようです……」

潮莉は呆れたように俺たちをチラ見する。

すると、美里はにっこりと笑い

「いつものことだから、いちいち気にしていると無駄に体力使うだけだよ」

と言った。体力は使わないと思うが。

「そうですね。それなら安心しました」

安心するのかよ！

「それに、喧嘩するほど仲がいいと言いますものね」

潮莉の言葉に、俺たち二人はほぼ同時に反応した。

「水と油！」

「油と水！」

女子二人はただ苦笑するだけ。

俺たちもなんとなくかばかしくなってきたので、結局言い争いを止めてしまった。

「恵くん」

すると、美里が唐突に声をかけてきた。

「なんだ？」

「今日こそ作るから」

「コッペパン？」

俺が問い返すと、美里はため息をつく。

「わざと間違えてる？ わざとじゃなかったら、正直怒るよ」

「怒っても美里は怖くない」

「むー！ 今年の文化祭は絶対部員集めてお化け屋敷やるんだ。そして、恵くんを泣くまで怯えさせてあげる！」

美里は精一杯に怖い顔をして言った。それでも怖くないのだから、得をしているというべきか、損をしているというべきか。

「それより、部員集まるのか？ あと四人だろ」

「うっ……」

俺の詰問に美里はばつの悪そうな表情を浮かべた。そして、俺から視線を逸らし、朝日指す窓の外を見つめた。

「……大丈夫……だよ……」

小さな声で言うと、彼女は自分の席まで戻っていく。俺達三人はその様子を無言で見つめているしかできなかった。

「……潮莉……」

「はい？」

「……家庭科部は去年で三年生が全員卒業してしまった。今は……あいつ一人なんだ……」

俺の言葉にすっかり耳を傾けてくれる潮莉。真剣そうな瞳が、少しだけ頼もしかった。

「あいつ、入学した時も、家庭科部に入ること、すごく悩んでいたんだ。俺が後押ししてやらないと、たぶん部活なんてやっていなかった」

「……はい……」

潮莉はただただ頷く。

「それだけ悩んで入部した部活だ。俺は……できれば存続させてやりたい……」

「はい……」

転校したてのこいつに、そんなことを相談しても仕方ないと思っただ。だが、俺の口は止まることを知らなかった。

「……あいつ……春休みの間もずっとおいしく作る方法を研究していたって……美来が言っていた。だから……」

「はい、試食しに行きましょう！」

「え？」

潮莉は分かっていたのだろうか。

「試食して……最高のコッペパンを……新入生に食べさせてあげましょう！」

そんなものを食べさせてどうする！ いや、そんなものと言うのは失礼か。下手すれば射殺される。

しかし、潮莉の気持ちも俺と同じだということだけはよく分かった。

「俺も手伝うぜ」

志島も顎に手を当てながら言う。

「美里ちゃんの料理、上手いんだぜー」

「そうなんですか？ すごいです！」

志島の方は、単に美里の作るものを食べたいだけのようにも思われるが、一応頭数には入れておいてやるう。どうせ大して役に立たないだろうし。

「それに……足手纏いになるだけかもしれないですけど……わたしもお手伝いしたいです……。ダメ……でしょうか……」

「……ダメなわけない。俺もそうしようと思っていたところだからな。……それより、放課後の貴重な時間を潰してしまってもいいのか？」

俺は聞いた。すると、潮莉は爽やかな笑顔で返してくれた。

「もちろんです」

۵

第13話 八子さん

授業中はぐっすり居眠り。いつもの通りの俺だ。そして、そんないつもの通りの俺を、無理やりでも起こそうとする人はいるはずもなく……。

「……きてください」

いや、いた。二日前には空席だった俺の後ろの席の主。転校生というラベルがなければ、見向きもしなかったかもしれない少女だ。

「起きてください……」

俺は安眠を保とうとしたが、少女の方も一向に諦める様子を見せない。

「ふああ……」

仕方なく俺は体を起こして振り返った。日光で銀縁の眼鏡が美しく輝いている。

「あ……」

「……」

目と目が合う。潮莉は困った表情を浮かべている。

「……眼鏡……かけてたんだな」

「……授業中だけ」

小さくて消え入りそうな声が俺の耳に確かに届いた。すると、彼女の何倍も大きな声が、前方から容赦なく降り注ぐ。

「……恵一、授業を寝て過ごすのが、お前の類稀なる特技だということも重々に承知している。だが、それを快しとしない連中もいるということをお前は承知しているか」

「……」

別の眼鏡が輝く。教壇に立つ東雲勝治先生だ。彼の表情は、潮莉の表情とは全く違ったものだ。言葉を飾る必要もない。怒っているのだ。

「わたしもその連中の一味だ。しかしまあ、今日はよく晴れている

から、眠たくなるのも無理はなかつた」

そう言つて勝治先生は俺の方に近づいてきた。そして、頭上に何かを乗せる。

「あ……あ……」

すると、なぜか潮莉の声が聞こえてきた。その声が震えている。何があつたというのだ。

おそらくその犯人であろう勝治先生も、どうしたのだからと言いたげに首を傾げていた。

俺は気になつて振り返る。潮莉は縮こまつてただただ体をガタガタさせていた。目には涙さえ浮かんでいる。

「どうした？ 具合悪いのか？」

「……」

返事はない。ただの屍のようだ……と冗談を言っている場合ではない。

「先生、何をしたのですか？」

「うん？ ただ、スズメバチの模型をお前の頭に乘せてやつただけなのだが……」

何でもないように言う先生。いや、どう見てもそれが原因だろ。

「はあ……」

俺はため息をつきながら、頭の上のそれを取つた。なるほど、確かに良くできている。ぱつと見では本物と区別がつかない。寝起きの人には効果絶大だろう。

最初はそのまま素直に先生に返そうと思つたのだが、ちよつとした悪戯心が俺には芽生えてしまった。

「先生、ちよつとやつてしまつてもいいですかね……」

俺は小声で相談した。

「……悪いことは言わん。……やつてしまえ」

おい。

しかし、これで先生の了承は得た。もし責められようものなら、先生のせいにしてやる。俺はにやけ顔で模型を彼女の目の前に置い

た。そう。目を開けて一番最初に視界に入ってくるのがそれである
ぐらいの位置に。

「おい、蜂はどっか行つたみたいだぞ」

俺は彼女の肩を軽く叩きながら、これ以上はないというぐらいに
優しい声で言った。

「ほ、本当ですか」

彼女はまた震える声で返事をし、恐る恐る目を開けた。

「え……」

潮莉の反応がいかなるものであったかは、彼女の名誉のためにも
省かせてもらう。ただ、一つだけ言っておきたい。次の休み時間
には、頬をこれ以上はないというぐらいに赤くした彼女の姿を拝むこ
とができたということ。

第14話 和解？ いや、誤解？

しかし、それからが大変であった。潮莉は意外にもかなりご立腹のようで、全部の授業が終わって放課後になってもなお、口を聞いてくれなかった。ただただ、頬杖を突きながら窓の外をぼーっと眺めていただけであった。まるで、俺のことなど意識の内にならないかのように。

「怒ってるのか？」

俺はそつと尋ねてみた。

「怒ってないです……」

素っ気ない返事が返ってきた。彼女の視線は決して動くことなく、青空に浮かぶクローワツサンのような形をした雲に止まったままだ。

「お腹減ったなあ」

今度は別の問いにしてみる。割と自然な問い。

「はい、減りました」

素直に答えてくれた。

「でも、今は食べる気分ではありません」

それでも、相変わらず俺を許してくれるわけではないらしい。こいつがなんとなく意地っ張りな感じの奴だということは、昨日の時点で勘付いてはいたが、まさにその通りであった。

「はあ……悪かったよ」

ついに俺は折れた。

「ちょっとした悪戯のつもりだったんだ」

「本人が悪戯だと思っけていても、被害者が苛めだと思えば、それは苛めになるんです」

どちらかというと声量の小さい潮莉にしては、よく通る声であった。彼女はすつと席から立ち上がると、鞆を手に持ち、こう続けた。「わたし、小学校の六年生の時に、スズメバチに刺されたことがあります。わたしが生まれて初めて同級生と一緒に出かけして……」

ある山中でキャンプをした時のことでした」

「……………」
俺はただ頷いているしかなかった。彼女の悲しげな瞳に、ほんの一言さえも口外できなかつたのだ。

「それで、わたしだけ病院送りです。もちろん、命に別状がなかつたのは良かったですよ。でも、せつかくの楽しい時間が台無しになつてしまいました。わたしだけ……………病院で他の人の楽しんでいるところを見ることさえもできずに……………待っているしかなかったのです……………」

潮莉は表情を曇らせた。余程苦い思い出なのだろう。そうになるとやはり俺は、俺自身が思っていた以上にまずいことをしてしまったということになるのだろうか。

「……………いいんです。わたしはいつだってそうでしたから。それより、家庭科室に早く行きましょう。もしかしたら、わたしのせいで、美里さんをお待たせしてしまったかもしれない」

潮莉は頭を下げて言った。

「いや、俺がバカなことをしたせいだ」

「でも……………わたしも……………つまらない意地を張ってました……………」

「それでもいいさ。なんとなくお前らしいし」

俺は優しくそう言つて、潮莉の頭を軽く撫でた。首を傾げる潮莉。「なあ、もしお前がよかつたらさ、今夏、キャンプに行くか？ 美里も美来も……………おまけで志島も誘つて……………その日にできなかつたことをやってみないか？」

潮莉は顔を上げた。そして、軽く目を閉じながら、体を震わせ始めたのである。

「……………どうした……………」

俺は慌てて潮莉の顔を覗き込んだ。彼女の瞳から、一粒の涙が零れ落ちた。それは彼女のスカートの上に落ちて、すぐに判別できなくなつてしまった。

「……………楽しみ……………です……………。すごく……………楽しみです……………」

小さな声で彼女は言った。先ほどまでとは打って変わって、心の底から嬉しそうに。

その直後であった。

「あーっ！」

バカもとい志島の絶叫が教室の中に響き渡った。

「お前……」

志島は俺たちの様子を見て、握り拳を作りながら近寄ってきた。そして、眉間に皺を寄せながら、すごい剣幕で俺を睨みつける。

「授業中の一件からすごく気になってたんだけどさ……お前しおりんを泣かせたいの？」

俺は何も言えなかった。俺はほんの悪戯心ではあったが、確かに彼女のトラウマを突いてしまったからだ。

すると、潮莉は顔を上げて、志島の目をしっかりと見ながら

「……ありがとうございます……和希さん……。でも……わたし、今は悲しくて泣いているんじゃないです……」

と言った。志島はただ目を丸くしてそんな彼女を見つめる。

「……そうなのか？ こいつの前だから、本当のことが言えないんじゃないのか？」

疑いの目で見える志島。至極当然のことだろう。しかし、潮莉は涙を拭くと、優しい笑顔で

「本心です」

と答えた。志島は俺と潮莉の顔を見比べていたが、顎に当てて考える仕草をしたのち

「しおりんがそう言うなら、そうなんだろうな……」

とだけ言うのであった。

「はい！」

何の迷いもない潮莉の肯定の言葉がその後に続いた。

ところで、一応、仲直りはできたということでのいいのだろうか。

俺は何とも表現しがたいもやもやした気持ちのまま二人を連れて家庭科室に向かった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6442x/>

雪影

2011年10月28日03時09分発行